書評論文：マギー・ジョンソン＆アリソン・ウィントゲンズ著「場面緘黙リソースマニュアル（第 2 版)」(2016)

Review Essey: *The Selective Mutism Resource Manual (2nd ed.)* by Maggie Johnson & Allison Wintgens (2016)

園　山　繁　樹
（保育教育学科）

キーワード：　場面緘黙　英国　書評

1. はじめに

「国立国会図書館サーチ」で検索すると、場面緘黙に関する我が国で最も早い学術図書の出版は、1973 年に黎明書房から出版された「講座情緒障害児〈第 3 巻〉自閉症児・緘黙児」(十亀史郎著，内山喜久雄監修）である。一方、場面緘黙に関する海外の学術図書の翻訳は、2005 年にカナダで出版され、2007 年に邦訳が田研出版から出版されたマクマスター大学の McHolm, A.E.他著「場面緘黙児への支援―学校で話せない子を助けるために―」が最初である。それ以降、次のように合わせて 6 冊の訳書が出版されている（以下，(　) 内は原著者の居住国；訳書出版社)。2009 年「場面緘黙へのアプローチ―家庭と学校での取り組み―」（英国；田研出版)、2015 年「先生とできる場面緘黙の子どもの支援」（米国；学苑社)、2017 年「場面緘黙支援の最前線―家族と支援者の連携をめざして―」（英国；学苑社)、2018 年「場面緘黙の子どもの治療マニュアル―統合的行動アプローチ―」(米国；二瓶社，評者〔園山〕監訳)、2019 年「場面緘黙の子どものアセスメントと支援―心理師・教師・保護者のためのガイドブック―」（米国；遠見書房)。これらの訳書の出版により、海外の場面緘黙に関する研究や支援の詳しい情報が容易に入手できるようになり、我が国の場面緘黙研究・支援に大きな寄与をしている。

本稿で取り上げる Johnson, M.と Wintgens, A.の共著 *"The Selective Mutism Resource Manual, 2nd edition"* は 2016 年に英国で出版されているが、2001 年の初版ともども我が国ではまだ翻訳出版されていない。しかしながら、場面緘黙支援に関するきわめて重要な学術図書である。本書は「大著」である。原書は A4 版で 338 頁、加えて本書購入者にオンラインで提供される資料（付録等）が 244 頁あり、計 582 頁の大著となっている。

本書の最大の特長は、場面緘黙の理解と支援についてきわめて包括的、かつ詳細、かつ、明快に記述され、さらに介入の様々な工夫やアイデアが多数紹介

されている点にある。評者が臨床活動の中で、また関連文献を読みながら疑問に思っていたことや十分理解できなかった事柄について、本書ではきわめて明快に説明されていた。本稿では、本書の特長や我が国の場面緘黙の理解と支援に役立つ内容を紹介しつつ、その意義について論じてみたい。

2. 本書の構成と著者

1) 構成

本書は 5 部から構成され、最後の第 5 部は本書購入者にオンライン提供される資料（付録等）となっている。本書の全体像を理解するために、目次から章タイトルを翻訳して表 1 に示した。

表 1　本書の章立て

第1部　場面緘黙の理解	pp.1-47
第1章　場面緘黙についてよくある質問	
第2章　場面緘黙についての包括的な見方	
第2部　場面緘黙の発見とアセスメント・ガイドライン	pp.49-109
第3章　診断する：知っておくべきこととその理由	
第4章　アセスメントの重要部分：最初の情報収集	
第5章　子どもたちに会う方法	
第6章　次のアセスメント：詳細な情報収集	
第7章　アセスメントからマネジメントへ	
第3部　マネジメント	pp.111-252
第8章　不安のない環境を作る：出発地としての家庭と学校	
第9章　家庭や地域社会で恐怖感に少しずつ向き合う	
第10章　学校場面で恐怖感に少しずつに向き合う	
第11章　うまく移行を進める	
第4部　省察的実践：経験から学ぶ	pp.253-325
第12章　トラブルシューティング：なぜうまくいかないのか？	
第13章　場面緘黙以上の場合	
第14章　介入事例	
第15章　場面緘黙を経験した人から学ぶ	
第5部　オンライン資料	pp.339-582
付録A　自信を持って話せるようになるための活動	
付録B　電話、一人で話す、シェイピングプログラムによる発話の確立	
付録C　プログラムの目標、記録システム、個別教育計画の例	
付録D　法的、専門的、及び教育的支援	
付録E　本書のエビデンスとなる根拠と参考文献	
付録F　リソース及び役立つ連絡先	
印刷用資料	
10代や成人向けのブックレット	
記録用紙	
達成度確認表	

注）Johnson & Wintgens (2016) のContents (pp.v-vi) の章タイトルを評者が翻訳した。
第3部のタイトル「マネジメント」は「支援」や「介入」の意味である。

2）著者

本書はマギー・ジョンソンとアリソン・ウィントゲンズの共著であり、著者紹介によれば両著者とも言語聴覚士（Speech and Language Therapist）である。ジョンソン氏は Kent Community Health NHS Foundation Trust に、ウィントゲンズ氏はロンドンのセントジョージ病院に勤務する臨床家である。場面緘黙に関する支援経験は二人合わせて 60 年以上になり、支援を行ったケースも数百に及び、本書は両著者の長年に渡る豊富な臨床経験に裏打ちされている。

両著者とも「場面緘黙支援の最前線―家族と支援者の連携をめざして―」(Smith & Sluckin, 2014）の分担執筆者であり、ジョンソン氏は「第 11 章 場面緘黙のケアパスの有効性」（共著者 3 人の筆頭著者）、ウィントゲンズ氏は「第 6 章 場面緘黙と自閉症スペクトラム障害の関連性」を執筆している。また二人の共著は本書及びその初版以外にもう 1 冊ある（Wintgens & Johnson, 2012）。

3．本書の特長と意義

1）場面緘黙の症状形成を恐怖条件づけパラダイムで説明し、介入技法の中核を段階的エクスポージャー法とする

本書の記述の明快さの一つは、場面緘黙を様々な範囲の他者に話すことに対する限局性恐怖症（specific phobia）と捉え、その症状形成の基礎的メカニズムを恐怖条件づけパラダイムで説明し、話すことに対して学習された恐怖心が中核にあるとしている点である。もちろん、生来的な気質や環境的な出来事など多様な要因が一人ひとり個別に関係していることを前提としつつ、症状形成を恐怖条件づけパラダイムで説明し、その後、様々な回避行動や認知面への影響により多様な状態像がもたらされるとしている。このことは基本的な介入技法として、必然的に、話すことに対して学習された恐怖心が条件づけられている様々な刺激や事態に対して恐怖心が生じないようにする技法である「段階的エクスポージャー法（graded exposure)」を選択することにつながる。このような症状形成の説明と介入技法の選択は、同じく行動論的立場から支援を行っている評者（例えば，園山，2017）には納得しやすいものであった。

米国精神医学会の診断基準 DSM-5（American Psychiatric Association, 2013, pp.195-197）では、場面緘黙は不安症の一つとされている。場面緘黙の子どもたちの中には、学校場面で話さないだけで他児と楽しく遊び、特別な不安なく学校生活を過ごしている子どももいる。このような子どもの場面緘黙を不安症と考えるのは疑問を持ちやすいが、話す行為に限局した恐怖症と考えると理解しやすい。もちろん、話す行為は周囲の子どもや大人に自分の声を聴かれることを伴い、自分の声を聴かれることに対する恐怖心も同時に存在してい

ると言える。

恐怖条件づけに限定しているわけではないが、場面緘黙の症状形成を行動論的枠組みで説明し、介入技法として段階的エクスポージャー法やその他の行動的技法を推奨しているのは他の訳書でも同様である（Bergman, 2013; Kearney, 2015; Kortba, 2015; McHolm et al.,2005）。

2）場面緘黙には多様な状態像がある

DSM-5 では場面緘黙の中核症状を「他の状況で話しているにもかかわらず、話すことが期待されている特定の社会状況（例：学校）において、話すことが一貫してできない」(邦訳, p.193）状態とされている。この「特定の社会的状況において話すことが一貫してできない状態」について、著者らは本書の 31 頁で「はっきりした場面緘黙（high-profile SM)」と「目立たない場面緘黙(low-profile SM)」という用語を用いて、場面緘黙の中核症状である「特定の社会的状況で話すことができない」ことに含まれる多様な状態像を説明している。「はっきりした場面緘黙」にも学校で全く話せないケースや、仲のよいクラスメートとは話せてもそれ以外の子どもや教師とは話せないケース、校庭や遊び場ではクラスメートと話せても教室では話せないケースまで、多様な状態像があることが紹介されている。一方、「目立たない場面緘黙」はそれらの話せない場面でも促されれば小声で短く話せたり、簡単な質問には単語レベルで答えたりするケースである。後者は話すことの恐怖心よりも話さないことで生じる出来事に対する恐怖心が勝っている状態と説明され、いずれの場合も恐怖心や不安感が大きく、行動や情緒に影響が及んでいる状態であることは同じであり、恐怖心や不安感を克服できるような支援・介入が必要とされている。

また、第 13 章で詳述され、他の訳書でも指摘されているが、社交不安症やその他の併存症により、場面緘黙症状は多様なものになることにも注意が必要である。一人ひとりの場面緘黙症状を的確に把握することにより、支援や介入の方法及び工夫も多様なものとなる。

3）介入計画が体系化され、具体的方策が多数紹介されている

介入については第 8 章から第 11 章にかけて詳述されているが、骨子は以下のようである。

（1）学校を含めあらゆる場面で子どもが感じている不安を軽減する（第 8 章）

家庭や学校などで子どもが直面している不安場面を改善する。そのために、不安場面を特定すること、家族や学校関係者の場面緘黙と不安についての理解を高めること、話すことに代わるコミュニケーション手段の使用など、まずは子どもが安心して生活できるようにする具体的な方法が紹介されている。

場面緘黙経験者 22 名に学校での困難場面を回答してもらった評者らの調査(奥村・園山, 2018）では、音読や指名時の発言などの直接的な発言場面のほか

にも、グループ活動や体育、休憩時間、行事など、本人が主体的に行動したり、対人交渉が必要な諸活動が困難場面として挙げられていた。これらの困難場面では、孤立、身体動作の抑制、困難を回避するための欠席といった参加機会の制限に繋がることもあり、安心して学校生活を送るためには、少なくともこれらの困難場面で不安が生じないような配慮や支援が不可欠である。

(2) 家庭や地域場面で恐怖心に徐々に慣れていく（第 9 章）

一般に場面緘黙の子どもは学校で話すことが難しくても、家庭では自由に話していることが多い。家庭場面は不安の少ない安全な場所になっているので、家庭を基盤に他児との関係づくりや地域場面で話せる機会を増やすようにしていく。その際にも、ボイスメッセージの活用や後述するスライディングイン技法の適用など、達成度（進度）によって様々な工夫が紹介されている。

(3) 学校場面で恐怖心に徐々に慣れていく（第 10 章）

この中核的技法が段階的エクスポージャー法である。また学校場面で誰かに話せるようになっても急がず、自信をもって話せる人や場面を少しずつ増やしていくこと、不安感をもたらさない、あるいは不安の少ない活動（数字や月など短い言葉を言ったり、よく知っていて慣れている活動など)を用意すること、学校の関係者全員が場面緘黙の特徴を理解し、子どものペースに合わせて対応すること、関係者全員が計画的にかかわることなどが重要であるとされている。

(4) 移行の時期も積極的に捉える（第 11 章）

ここでの移行とは、幼稚園や小学校への入学、中学校・高校・大学等への入学、学年が変わり担任やクラスメートが替わること、あるいは青年期への移行など、これまでの生活パターンが変わる様々な時期が取り上げられている。変化に戸惑わないようにする方策や、環境の変化を場面緘黙の改善に積極的に活かす方策など、様々な工夫やアイデアが紹介されている。

4) 早期発見・早期介入を奨める

本書では場面緘黙の早期発見・早期介入を強く奨めている。第 2 章では「早期介入の重要性」の節を設け、「早期介入はきわめて重要である。最も効果的で効率的で思いやりのある方法である」と強調されている。次いで「場面緘黙を無視することの代償」の項が設けられ、不安症が強くなる可能性や不登校などの二次障害の可能性、場面緘黙の期間が長くなるほど複雑化し改善に時間がかかることなどが詳述されている。

もちろん後述の 7) で取り上げるように「場面緘黙を克服したり QOL を高めるために、遅すぎることはない」ことも確かであるが、早期介入がより効果的で効率的であることは、評者の経験からも首肯できる。そのためには、保育所、幼稚園、こども園等の幼児教育機関で場面緘黙の正しい知識が広がり、早期発見と早期介入が確実にできるような体制作りが急務である。

5）家族を含めた関係者の協働や多職種連携を奨める

他の訳書でも同様に奨められているが、本書でも場面緘黙の支援にあたっては家族や本人、担任、校長・園長、臨床心理専門職、言語聴覚士、保健師などの関係者の協働や多職種連携が奨められている。

6）役立つオンライン資料が豊富にある

本書の大きな特徴は、第 5 部として、本書購入者が入手できるオンライン資料が豊富に用意されていることである。第 4 部までの内容を補足したり、より具体的に説明されている。介入の中で実際に使用する活動や手続きを具体的に説明したり、様々な記録方法を示したり、印刷して使用する資料や記録用紙等々が含まれており、本書で述べられていることをより包括的、かつ、具体的に理解する助けになる。

例えば、第 9 章で紹介される「スライディングイン技法（Sliding-In Technique)」についても、印刷用資料の 15～17 でさらに具体的、かつ、詳細に解説されている。スライディングイン技法は刺激フェイディング法と同義と考えられ、段階的エクスポージャー法と同様に場面緘黙の中核的な介入技法とされている（Bergman,2012; 趙・河内山・園山, 2019; Kearney, 2010; Kotrba, 2015; Smith & Sluckin, 2014)。

7）疑問に明快に答える

順番が最後になったが、第 1 章の「場面緘黙についてよくある質問」の中で著者らは 33 の質問を取り上げ、すべての質問に対して明快に回答している。評者がこれまでの臨床活動の中で疑問に思っていたことに対しても、明快な回答がなされていた。

例えば、28 番目の質問「場面緘黙のある人が 10 代や大人になってから支援を受けるのは遅すぎないか?」に対して、「場面緘黙を克服したり QOL を高めるために、遅すぎることはありません」と答え、第 10 章に「思春期や青年期について」の節を設け、呼吸法や認知変容、具体的な会話スキル練習など、様々な方法が具体的に紹介されている。また、第 14 章では思春期の二人の介入事例（リサ〔15 歳 10 か月で介入開始〕とサンダー〔16 歳で介入開始〕）も紹介されている。特にサンダーは他国の在住者で、母親に対する e-mail によるコンサルテーションを行い、大きな改善が見られた事例である。

4. おわりに

場面緘黙に関する我が国の状況を踏まえて、著者らの見解に強く賛同したことを最後に述べておきたい。著者らは 36 頁に「場面緘黙の有病率」の項を設け、「目立たない場面緘黙」にも注目すべきであるとした上で、次のように述べている。

「すべての小学校やほとんどの中学校には少なくとも一人の場面緘黙の子どもが在籍していると考えられ、すべての教員が場面緘黙の子どもに出会う可能性があると言える。そのため、すべての教員養成・研修機関で教育ニーズの一つとして場面緘黙の理解を含めることを強く求める。」

評者らの調査（Matsushita, Okumura, Sakai, Shimoyama, & Sonoyama, 2019）でも、回収率は低いものの、場面緘黙の子どもが一人以上在籍していた学校園は、幼稚園で約 3 割、小学校で約 4 割、中学校で約 5 割であった。このことから、教員は数年に一人は勤務校園で場面緘黙の子どもに出会う可能性があり、早期発見・早期対応ができる知識の習得が求められていると言える。そのためには、現任研修も含め、場面緘黙について正しい知識を学ぶことのできる機会が必要である。評者は、本学で担当している授業科目のうち「幼児理解の理論と方法」と「障害児保育」で各 1 コマ、「情緒障害児教育総論」で 5 コマを場面緘黙に充て、保育士や教員として早期発見と早期対応ができることを期待している。また、教員免許状更新講習で担当した選択領域でも、2012 年度以降は場面緘黙について 1～2 時間取り上げてきたが、次年度は担当する 6 時間ほぼすべてを場面緘黙の理解と支援に充てる予定である。

本稿ではまだ翻訳出版されていないものの、場面緘黙支援にとって非常に重要な学術図書について紹介した。他の 5 冊の訳書を含め、2007 年以降は日本語で著された専門図書や場面緘黙経験者による図書が増え、早期発見・早期対応や適切な支援・介入に必要な参考図書は以前と比べてとても増えている状況にある。これらの図書を参考にして、場面緘黙のある子どもや大人に適切な対応がなされることを切に願うものである。

付記

本稿の作成には JSPS 科研費 20K20422 の助成を受けた。

引用文献

American Psychiatric Association. (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders (5th ed.)*. Washington, DC: Author. 日本精神神経学会（監修), 高橋三郎（監訳）(2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル．医学書院.

Bergman, L. (2012). *Treatment for children with selective mutism: An integrative behavioral approach.* New York, NY: Oxford University Press. 園山繁樹（監訳）(2018). 場面緘黙の子どもの治療マニュアル―統合的行動アプローチ―. 二瓶社.

趙成河・河内山冴・園山繁樹（2019). 場面緘黙を示す幼児に対するクリニッ

ク型行動的介入の初期段階における刺激フェイディング法及び随伴性マネジメントの適用．障害科学研究, 43, 183-92.

Johnson, M. & Wintgens, A. (2016). *The selective mutism resource manual (2nd ed.).* London, UK: Routledge (First published by Speechmark Publishing).

Kearney, C.A. (2010). *Helping children with selective mutism and their parents: A guide for school-based professionals.* New York, NY: Oxford University Press. 大石幸二（監訳), 松岡勝彦・須藤邦彦（訳）(2015). 先生とできる場面緘黙の子どもの支援．学苑社.

Kotrba, A. (2015). *Selective mutism: An assessment and intervention guide for therapist, educator & parents.* Eau Claire, WI: PESI Publishing & Media. 丹明彦（監訳）, 青柳宏亮・宮本奈緒子・小暮詩織（訳）(2019). 場面緘黙の子どものアセスントと支援—心理師・教師・保護者のためのガイドブック—. 遠見書房.

Matsushita, H., Okumura, M., Sakai, T., Shimoyama, M., & Sonoyama, S. (2019). Enrollment rate of children with selective mutism in kindergarten, elementary school, and lower secondary school in Japan. *Journal of Special Education Research,* 8, 11-19.

McHolm, A.E., Cunningham, C.E., & Vanier, M.K. (2005). *Helping your child with selective mutism.* Oakland, CA: New Harbinger Publications. 河井英子・吉原桂子（訳）(2007). 場面緘黙児への支援—学校で話せない子を助けるために—. 田研出版.

奥村真衣子・園山繁樹（2018). 選択性緘黙のある児童生徒の学校場面における困難状況の理解と教師やクラスメイトに求める対応—経験者への質問紙調査から—. 障害科学研究, 42, 91-103.

Sage, R. & Sluckin, A. (eds.) (2009). *Silent children: Approaches to selective mutism.* Leicester, UK: University of Leicester. 杉山信作（監訳), かんもくネット（訳）(2009). 場面緘黙へのアプローチ—家庭と学校での取り組み—. 田研出版.

Smith, B.R. & Sluckin, A. (eds.) (2014). *Tackling selective mutism: A guide for professionals and parents.* London, UK: Jessica Kingsley Publishers. かんもくネット（訳）(2017). 場面緘黙支援の最前線—家族と支援者の連携をめざして—. 学苑社.

十亀史郎（1973). 講座情緒障害児〈第 3 巻〉自閉症児・緘黙児．黎明書房.

園山繁樹（2017). 選択性緘黙を示す小学生の担任、母親および特別支援教育コーディネーターへのコンサルテーション．障害科学研究，41，195-208.

Wintgens, A. & Johnson, M. (2012). *Can I tell you about Selective Mutism?: A guide for friends, family and professionals.* London, UK: Jessica Kingsley Publishers.